

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

So Young ~ 過ぎ去りし青春に捧ぐ ~
(致我們終將逝去的青春)

2013年・中国映画
配給/アルシネテラン・131 分

2014 (平成26) 年9月24日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：趙薇（ヴィッキー・チャオ）
製作：關錦鵬（スタンリー・クワン）
脚本：李樺（リー・チャン）
編集：陳志偉（チー・ワイチャン）
原作：辛夷塢（シン・イーウー）『致
我們終將逝去的青春』
主題歌：王菲（フェイ・ウオン）『致
青春（To Youth）』
出演：趙又廷（マーク・チャオ）/
韓庚（ハンギョン）/楊子姍
（ヤン・ズーシャン）/江疏
影（ジャン・シューイン）

👁️👁️ みどころ

「四大名旦（中国四大女優）」の1人である趙薇（ヴィッキー・チャオ）が北京電影学院の監督科に再入学し、卒業制作作品として初監督した本作はタイトル通り、正真正銘の青春映画。80后、90后の若者たちの90年代の大学を舞台とした青春を大いに楽しみたい。

「青春文学の女王」と呼ばれる辛夷塢（シン・イーウー）の原作だけに、ヒロインを軸とする4人の女子大生のエピソードはそれぞれに面白いが、ミソはラスト30分に観る卒業後のそれぞれの人生模様だ。

団塊世代の私は自分の青春時代と対比しながら楽しんだが、ヒロインの鄭微（チョン・ウェイ）と同世代の日本人学生は、それとは違う視点で楽しみかつ学ばなければ！日本にも、趙薇と同じような才女の登場を大いに期待したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■女優・趙薇の活躍ぶりとは？■□■

言うまでもなく趙薇（ヴィッキー・チャオ）は、章子怡（チャン・ツイイー）、徐静蕾（シュー・ジンレイ）、周迅（ジョウ・シュン）と並ぶ「四大名旦（中国四大女優）」の1人。1976年生まれの趙薇は北京電影学院を卒業した才女で、日本では『少林サッカー』（01年）と『レッドクリフ Part I』（08年）（『シネマルーム21』34頁参照）、『同Part II』（09年）（『シネマルーム22』178頁参照）で有名だ。しかし、私にはそれよりも『緑茶（GREEN TEA）』（02年）（『シネマルーム17』450頁参照）と『初恋の思い出（情人結）』（05年）（『シネマルーム21』117頁参照）における名演の方が心に残っている。

ちなみに、『初恋の思い出 (情人結)』はNHKラジオテキスト「まいごち中国語」の2010年10月から翌2011年3月まで5か月間にわたって「映画で身につく! 応用会話」講師・水野衛子の教材とされたので、私もかなり勉強した。また、『緑茶 (GREEN TEA)』では「1人で2役を演じ、その美貌のみならず演技力を見せつけたこの『緑茶』は、きっと彼女の代表作に……。」と書いた。

さらに趙薇は、『ヘブン・アンド・アース (天地英雄/Warriors of Heaven and Earth)』(03年)、『シネマルーム4』50頁参照) で中井貴一と、『夜の上海 (the Longest Night in Shanghai)』(07年)、『シネマルーム17』433頁参照) で本木雅弘と共演するなど、その活動領域の広さはすごい。

■他3人の「四大名旦」の活躍ぶりは? ■

日本の若者が一番よく知っている中国の美人女優といえば、最近は『ロスト・イン・北京 (苹果/Lost in Beijing)』(07年)、『シネマルーム30』136頁参照) の范冰冰 (ファン・ビンビン) だろうが、ひと昔前は何といっても、張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督の『初恋のきた道 (我的父親母親/The Road Home)』(00年)、『シネマルーム3』62頁、『シネマルーム5』194頁参照) で初々しい姿を見せた章子怡。

「四大名旦」の筆頭格である章子怡は、その後『グリーン・デスティニー』(00年)、『ラッシュアワー2』(00年)、『武士 (MUSA)』(01年)、『シネマルーム4』54頁参照)、『HERO (英雄)』(02年)、『シネマルーム3』29頁、『シネマルーム5』134頁参照)、『パープル・バタフライ (紫蝴蝶/PURPLE BUTTERFLY)』(03年)、『シネマルーム17』220頁参照)、『LOVERS (十面埋伏)』(04年)、『シネマルーム5』353頁参照)、『オペレッタ狸御殿』(05年)、『シネマルーム8』204頁参照)、『S AYURI』(05年)、『シネマルーム9』59頁参照)、『2046』(04年)、『シネマルーム5』359頁参照)、『ジャスミンの花開く (茉莉花開/Jasmine Women)』(04年)、『シネマルーム17』192頁参照)、『女帝 エンペラー (夜宴/THE BANQUET)』(07年)、『シネマルーム17』298頁参照)、『花の生涯 (梅蘭芳/Forever Enthralled)』(08年)、『シネマルーム22』223頁参照)、『ホームメン』(08年)、『シネマルーム23』未掲載)、『ソフィーの復讐 (非常完美)』(09年)、『シネマルーム23』未掲載) 等々に出演している。その章子怡と並んで「四大名旦」と呼ばれたのが、趙薇の他、徐静蕾と周迅の3人だ。

他方、1974年生まれて趙薇とよく似たかわいい系の美女・周迅は、『始皇帝暗殺 (The First Emperor)』(98年)、『シネマルーム5』127頁参照)、『ふたりの人魚』、『シネマルーム5』253頁参照)、『ハリウッド★ホンコン (香港有個荷里

活/HOLLYWOOD★HONG KONG)』(01年)、『シネマルーム5』286頁参照)、『小さな中国のお針子』(02年)、『シネマ2』29頁、『シネマルーム5』294頁参照)、『女帝 エンペラー(夜宴/THE BANQUET)』、『ウィンターソング(PERHAPS LOVE)』(05年)、『シネマルーム17』469頁参照)、『酔拳 レジェンド・オブ・カンフー』(10年)、『孔子の教え』(09年)、『シネマルーム27』99頁参照)等々で有名。さらに、私がインターネットの映像で観た、『画皮 あやかしの恋』(08年)、『妖魔伝 レザレクション(画皮2)』(12年)では、趙薇と周迅の2人が人間に恋をした美しき妖魔と、夫を妖魔の手から守ろうとする貞淑な妻の役で共演し、妖しげな雰囲気のお話を大いに盛り上げた。

さらに、趙薇と同じく北京電影学院出身の徐静蕾は、中国の女優の中でもピカイチの才女との呼び声が高い。彼女は『我愛你』(02年)、『シネマルーム17』345頁参照)、『傷だらけの男たち(傷城/CONFESSIOIN OF PAIN)』(06年)、『シネマルーム17』52頁参照)、『ウォーロード/男たちの誓い(投名状/The Warlords)』(07年)、『シネマルーム22』194頁参照)、『新宿インシデント』(09年)、『シネマルーム22』未掲載)等で有名だ。そして、『見知らぬ女からの手紙』(04年)、『シネマルーム17』312頁参照)では趙薇に先だって、監督デビューもしている。

■□趙薇が念願の監督業に進出！その戦略は？本作は？■□

私は2007年10月10日午後2時～4時まで、北京電影学院美術学部の902号教室で『坂和的中国電影論』と題する「特別講義」を行った(『シネマルーム17』111頁・「第1部『坂和的中国電影論』—北京電影学院講義録—」参照)。広いキャンパス内で、私が一番興味があった俳優棟を見学すると、その入り口には世界的な賞を受賞した先輩俳優たちの名前がズラリと並び汪巻。私がすぐに気づいたのは王志文(ワン・チーウエン)や趙薇の名前だ。さらに、各期ごとの集合写真や各期ごとの舞台風景などの写真が並べられており、そこにはすぐにわかる徐静蕾や周迅の顔などもあった。

趙薇は北京電影学院の俳優科を卒業した後、前述のような大活躍が続いていたが、長年の夢であった監督業をやるについて、何と彼女は北京電影学院の監督科に大学院生として再入学し、普通の学生として正規の授業を受けて卒業した。そんな彼女の大学院の卒業制作作品として作ったのが本作で、監督科の先生たちは本作を観て99点という最高得点を与えたい。もちろん、卒業制作作品が商業映画として公開されるのは例外的なケース。さらに、脚本、プロデューサー、美術には、とても卒業制作作品とは思えない著名人が配されているうえ、主題歌の『致青春(To Youth)』を歌っているのは何と王菲(フェイ・ウォン)だ。ちなみに、『キネマ旬報』9月下旬号85頁は「ヴィッキー・チャオ 努力なしでは得られなかった道」を特集しているので、興味のある方は是非それを参照されたい。

■□青春映画は日中台韓共通？本作は正真正銘の青春映画！■□

日本では青春モノや学園モノの映画・小説はメチャ多い。古くは石坂洋次郎原作、今井正監督、原節子主演の『青い山脈』（49年）から、1960年代に流行った日活の吉永小百合、浜田光夫、山内賢、和泉雅子等を中心とした青春モノまで幅広い。さらにTVでは、中村雅俊が歌った『ふれあい』が大ヒットし、1974年のTVドラマ『われら青春』等々がある。また、舟木一夫が歌った『高校3年生』や『学園広場』等の学園ソングや、それを素材にした青春モノ・学園モノの数々も、私たち団塊世代の青春時代の思い出だ。

他方、台湾には『九月に降る雨（九降風）』（08年）（『シネマルーム23』138頁参照）、『あの頃、君を追いかけた（那些年，我們一起追的女孩）』（11年）（『シネマルーム31』未掲載）が典型だし、『海角七号／君想う、国境の南』（08年）（『シネマルーム24』138頁参照）、『台北の朝、僕は恋をする』（10年）（『シネマルーム26』66頁参照）、『きみに微笑む雨（好雨時節）』（09年）、『台北に舞う雪～Snowfall in Taipei』（09年）（『シネマルーム24』143頁参照）等の瑞々しい作品がたくさんある。さらに、韓国には、『僕の彼女を紹介します』（04年）（『シネマルーム7』135頁参照）、『マルチュク青春通り』（04年）（『シネマルーム8』35頁）、『青春漫画～僕らの恋愛シナリオ～』（06年）（『シネマルーム11』341頁参照）、『猟奇的な彼女』（01年）（『シネマルーム4』132頁参照）等々たくさん名作がある。

しかし、「一党独裁体制」の国・中国にはいわゆる「青春モノ」は少なく、せいぜい『1978年、冬。（西幹道／The Western Trunk Line）』（07年）（『シネマルーム20』175頁参照）や『初恋の思い出』そして『サンザシの樹の下で（山楂樹之戀）』（10年）（『シネマルーム27』108頁参照）程度。いくら何でも、文化大革命時代の『5人の娘』（59年）や賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の『一瞬の夢（小武／Xiao Wu）』（97年）（『シネマルーム30』未掲載）、『プラットフォーム（站台／Platform）』（00年）（『シネマルーム30』未掲載）等を「青春モノ」というわけにはいかないだろう。

しかして、趙薇の監督デビュー作となり、第22回上海批評家対象最優秀新人監督賞、第29回中国電影最優秀新人監督賞を受賞した本作こそ、まさに中国における正真正銘の青春映画！

■この入学風景には私なりのデジャヴ（既視感）が■

パンフレットには「90年代後半に大学4年で天津に留学し、2年にわたり同年代の中国の学生たちと青春時代を共有した」という吉川龍生氏（慶應義塾大学経済学部准教授）の「遠く過ぎ去りし90年代に」という興味深いコラムがある。中国の大学や大学生活を知らない日本人が、本作で描かれる、18歳で憧れの名門大学に入学してきた鄭微（チョン・ウェイ）（楊子珊（ヤン・ズーシャン））たちのこれから始まる学生生活（＝青春）を理解するためには、このコラムは必読だ。

鄭微が入学した大学は北京大学や精華大学など特定のものではないが、一流の理工大学らしい。日本では90年代の大学は既にホントに勉強するための場所ではなくなっていたが、95～96年当時の中国では大学進学率は6.8%。鄭微と同じ寮の部屋になった美人学生・阮莞（ルアン・クワン）（江疏影（ジャン・シューイン））は、少数民族パイ族の出身らしい。いくら少数民族には「差別是正措置」（いわゆる「ゲタ」を履かせる制度）があるとはいえ、恋人の趙世永（チェン・シーヨン）（黃明（ホアン・ミン））が中央の大学に不合格だったことを考えれば、阮莞の学力の高さの程がよくわかる。もっとも、そうかといってみんながみんな大学で勉強だけしているわけではないことは、鄭微を囲基部に勧誘する先輩で金持ちの息子・許開陽（シュエイ・カイヤン）（鄭恺（ジョン・カイ））や面倒見がよく鄭微に一方向的に惚れ込んでしまう張開（チャン・カイノラオ・ジャン）（包貝爾（パオ・ベイアル））の姿を見ればよくわかる。

他方、せっかく鄭微が追っかけて同じ街の大学に入学してきたのに、それを無視して1人アメリカに留学してしまったという鄭微の故郷の5年先輩の恋人・林靜（リン・ジン）（韓庚（ハンギョン））や、貧しい家庭の出身ということもあって必死に勉強している、ちょっと変わり者の陳孝正（チェン・シアオチョン）（趙又廷（マーク・チャオ））の姿は、当時の競争社会・中国での典型的な大学生かもしれない。私が大阪大学に入学したのは1967年4月だが、本作に観る90年代の中国の有名大学における入学風景には、私なりのデジャヴ（既視感）が・・・。

■□■ 2人の出会いは最悪！まるで現在の日中関係？ ■□■

趙薇は才女で女優しかも映画監督だから、人間心理の分析には長けているうえ、自分自身が1976年生まれ女性だから、恋愛に関する女ゴコロには十分通じているはず。ところが、本作に見る陳孝正と鄭微との最初の出会いは最悪だ。陳孝正から突き飛ばされてひっくり返り、スカートの中のパンツが丸見えにされてしまうシーンまで登場する。そうされたのは、鄭微が勝手に陳孝正の大切なビルの模型を落としかけたためだが、いくら何でも突き飛ばさなくてもいいのでは・・・？

こんな時、日本の女性と違って中国の女性は強い。「謝れ！」と詰め寄る鄭微の姿には鬼気迫るものがある（？）うえ、翌日キャンパス内で陳孝正を見かけた鄭微からの更なる謝罪要求、そして食堂内で恋人の曾毓（ツォン・ユイ）（王嘉佳（ワン・ジアジア））と語り合う陳孝正の前にならずかと登場しての「嫌がらせ」としかいいようのない「挑発」ぶりを見ていると、陳孝正ならずとも、こんな女とは一刻も早く縁切りしたいと思うのは当然だ。2001年8月13日の小泉純一郎総理の靖国神社参拝や2012年9月11日の野田佳彦総理による尖閣諸島の国有化を契機として、日中関係は最悪の状態になっているが、本作にみる陳孝正と鄭微との関係は、まさに尖閣諸島をめぐる日中関係と同じようなもの・・・？

■□■最悪の男になぜ恋を？女ゴコロは不可解！■□■

ところが、ここで趙薇監督は意外にもこんな嫌がらせとしかいいようのない鄭微の陳孝正に対する行動は「恋ゴコロの表れだ」とストーリーを展開していくから、これにはおっさんながら男女の恋ゴコロには通じていると自負している私もビックリ。もっとも、鄭微自身も自分のそんな気持ちはわかっていなかったらしい。大学内に唯一ある公衆電話から「真夜中の恋愛話」のラジオパーソナリティ紫鵑（ハン・ホン）に、鄭微が涙ながらに「大嫌いなのに会いたくて、迷惑がられると泣きたくなる」と訴えると、意外にもラジオパーソナリティ紫鵑は「恋しているのでは？」と回答したからビックリだ。

本作が更に面白いのは、そこから態度を180度変えての鄭微の陳孝正に対する猛アタックぶり。陳孝正を寮の外に呼び出したり、図書館の中でつかまえたり、鄭微の陳孝正に対する「愛の告白ぶり」はきっと多くの日本人には驚きの連続だろう。これには寮の4人部屋で既に大の仲良しになっていた 美貌の阮莞、ボーイッシュな朱小北（チュー・シャオペイ）（劉雅瑟（リウ・ヤーソー））、潔癖症で情報通の黎维娟（リー・ウエイジュアン）（張瑤（チャン・ヤオ））も呆れ顔で、「女の恥！」とまで避難されているよと忠告するものの、今の鄭微にはそんな忠告は全く耳に入らないようだ。日本でも大ヒットした韓国映画『猟奇的な彼女』や『ボクの彼女を紹介します』にみる、韓国女性にもかなり驚かされたが、本作にみる中国人女性・鄭微は日本人女性の中にはまずいないタイプだ。日本人でも女ゴコロは不可解なのに、本作にみるヒロイン・鄭微の女ゴコロは、まさに不可解！



『So Young ～過ぎ去りし青春に捧ぐ～』 配給：アルシネテラン
©2013 HS Media (Beijing) Investment Co., Ltd. China Film Co., Ltd. Enlight Pictures. PULIN production limited. Beijing Ruyi Xinxin Film Investment Co., Ltd. Beijing MaxTimes Cultural Development Co., Ltd. TIK FILMS. Dook Publishing Co., Ltd. Tianjin Yuehua Music Culture Communication Co., Ltd. All rights reserved.

■□■この積極性とオヤジ性にビックリ！そのキスシーンは？■□■

中国で大ヒットした日本の曲は、谷村新司の『昴』と千昌夫の『北国の春』だけ。そう

思っているあなたは古い。中国では、山口百恵の『赤いシリーズ』は大人気のTVドラマだったし、松田聖子、浜崎あゆみはもちろん、五輪真弓の『恋人よ』や岡本真夜の『TOMORROW』、MISIAの『Everything』等も中国人の大好きな曲だ。さらに、日本のアニメが軒並み大人気なのは常識だ。そんな予備知識を持っていけば、大学の芸術コンクールでの発表待ちの間に、鄭微が司会者の呼びかけ(?)に応じて厚かましくも飛び入りで舞台上って、歌い始めた『紅日』を聴いてもビックリしないはずだ。まさにこれは、日本で1991年に大事MANブラザーズが歌って大ヒットした『それが大事』、その曲だ。

私の大学時代は教室や下宿より雀荘を訪ねた方が友人を発見しやすかったほど麻雀が大流行だったが、今の学生は麻雀には見向きもしない。ましてやトランプや花札などはそのルールすら知らないだろうが、本作を観ると90年代の中国の大学の学生寮ではトランプ(のバクチ)が流行っていたことがわかる。もっとも、これは男子寮に限定されていたが、何と鄭微はそこに入り浸って賭けトランプに興じていたからこりゃ完全にオヤジ! 鄭微の猛アタックの前に、せっかく恋人にしていた副学長の娘・曾毓をつつまで鄭微と恋人状態になっていた陳孝正だが、元来真面目一徹の陳孝正にとってこんな自堕落(?)な鄭微の姿が我慢できなかったのは当然だ。しかし、陳孝正は鄭微に対して「勝手に恥を晒せ!」と罵った(?)が、以外にもそこから会話は「男は火星、女は金星。火星に乗っ取るわよ」というワケのわからない方向(?)に進み、2人は長いキスを続けることに……。



『So Young ～過ぎ去りし青春に捧ぐ～』 配給：アルシネテラン

©2013 HS Media (Beijing) Investment Co., Ltd. China Film Co., Ltd. Enlight Pictures. PULIN production limited. Beijing Ruyi Xinxin Film Investment Co., Ltd. Beijing MaxTimes Cultural Development Co., Ltd. TIK FILMS. Dook Publishing Co., Ltd. Tianjin Yuehua Music Culture Communication Co., Ltd. All rights reserved.

■原作者の辛夷塢は「青春文学の女王」の異名を! ■

本作の原作になったのは、80后、90后と言われる若者に大人気となっている辛夷塢(シン・イーウー)の『致我們終將逝去的青春』。彼女は80后を代表する女性作家で、「青

春文学の女王」という異名を取り、そのすべての作品が映画化の権利を求めて争奪戦を繰り広げているようだ。

趙薇が本作のために依頼したのが『孔雀 我が家の風景』（05年）で、原作者・脚本家として、顧長衛（グー・チャンウェイ）監督を第55回ベルリン国際映画祭銀熊賞・審査員グランプリの榮譽に導き、『おぼさんのポストモダン生活』（06年）で台湾金馬奨と香港金像奨の最優秀脚本賞にノミネートされた脚本家・李樺（リー・チャン）。李樺は辛夷塢の原作にさまざまな変更を加えたが、原作のコンセプトはそのままキープしているようだ。すると、芸術コンクールに1人で飛び入り参加し、舞台上立って『紅日』を歌い踊る積極性や、男子寮でトランプバクチに興ずるオヤジ性は、きっと80后、90后の女子学生の等身大の姿・・・？

本作では、そんな鄭微とチョー聖物の陳孝正が、ついにディープキスを交わすシーンに注目したい。

■□■こんな妊娠、墮胎のエピソードは日中共通！■□■

可愛くて魅力的だが、韓国映画の『猟奇的な彼女』によく似た（？）鄭微に対して、少数民族のブイ族出身の阮莞は大人で正統派美女。ところが、こんな美女の彼氏に限って頼りない男が登場するから世の中は面白い。本作はさすが「青春文学の女王」と呼ばれる辛夷塢の原作だけに、阮莞の部屋を訪れた故郷の恋人で今は別の大学に通っている趙世永が告白するのは、酔った勢いで同級生の女の子と関係を持ち、妊娠させてしまったのでどうしよう？という（しょうもない）トラブルだ。

こんな話は、日本では70年代、80年代の女子高、女子大ではどこにでも日常茶飯事



『So Young ～過ぎ去りし青春に捧ぐ～』 配給：アルシネテラン
©2013 HS Media (Beijing) Investment Co., Ltd. China Film Co., Ltd. Enlight Pictures. PULIN production limited.
Beijing Ruyi Xinxin Film Investment Co., Ltd. Beijing MaxTimes Cultural Development Co., Ltd. TIK FILMS. Dook
Publishing Co., Ltd. Tianjin Yuehua Music Culture Communication Co., Ltd. All rights reserved.

に転がっていたもの。そんな場合、現在結成されている「イスラム国」を退治するための米国を中心とした「有志連合」と同じように（？）、誰かが音頭を取って墮胎のための費用をカンパするのが女同士の友情だった。ところが、90年代の中国の大学では、趙世永の周りの女の子たちにはそれが通用しなかったらしい。そんな一夜限りの女の子の墮胎費用を趙世永の恋人である阮莞が工面するというのはいかにもムリ筋の話だが、それを「青春文学の女王」たる辛夷塢が書くと、中国では大ヒットするというから面白い。もともと、やっぱり阮莞も普通の女の子。趙世永のために面倒見のいい許開陽に頼んでお金を工面したうえ、趙世永に対して「今回だけは許してあげる」と観音様のような姿勢を示したが、いざ帰りの列車に乗り1人になると・・・。

9月9日に観たラース・フォン・トリアー監督の『ニンフォマニアック』（13年）は色情狂の女を主人公にしたチョー異色作だったが、本作は趙薇監督の卒業制作映画だけにセックスシーンは全くなし。私にはそれが少しモノ足りなかったが、それに代わって、こんなエピソードをしっかりと味わいたい。

■□■卒業は人生の分かれ道。そこでの各自の決断は？■□■

4年間の大学生活は長いようで短く、短いようで長い。それは誰でも同じだし、大学の卒業＝人生の分かれ道になるのも、みんな同じだ。私は学生運動に嫌気がさしたこともあって3回生の終わりから突然司法試験の受験勉強に入ったが、鄭微は多くの学生と同じように民間の企業狙いらしい。就職説明会に顔を出していた陳孝正が面接している企業のブースに登場した鄭微が「2人一緒に採用しませんか」とアタックをかける程だから、陳孝正も民間企業への就職を希望。私は一瞬そう思ったが、実は陳孝正はアメリカへの留学と二股をかけていたらしい。つまり、陳孝正の（前の）恋人だった曾毓は、副学長たる父親のコネで持っていたアメリカ留学の権利を恋人の陳孝正に譲るとともに、彼に対して①アメリカに留学し、鄭微を捨てる、もしくは②鄭微を選んで留学をやめる、という選択を迫ったわけだ。さて、そこでの陳孝正の決断は？

ここで陳孝正に①の選択をされると、鄭微は最初の恋人・林靜に続いて、2人目の恋人もアメリカ（留学）に奪われてしまうことになる。ここらの描き方の上手さも、辛夷塢が「青春文学の女王」と呼ばれる所以だろう。今ドキの日本人学生の留学希望者は激減しているが、中国では優秀な学生はみんな官費でのアメリカ留学を切望しているわけだ。ちなみに、鄭微の同室のボーイッシュな朱小北は「あるエピソード」で大学を去り、潔癖症で情報通の黎維娟も「あるエピソード」で子持ちの金持ちと結婚することになるが、それも辛夷塢の原作？それとも、これは李樺の脚本によって変更されたもの？そんなことをもつと突っ込んで調べながら原作を読めば、きっと面白いはずだ。

■□■大学卒業の数年後は？■□■

ノーベル文学賞作家・莫言の原作『白い犬とブランコ』を、霍建起（フォ・ジェンチイ）監督が映画化した『故郷の香り 暖』（03年）は、北京電影学院の俳優科を卒業した郭小冬（グオ・シャオドン）と李佳（リー・ジア）という2人の女優が主演し、香川照之が耳が不自由で口の聞けない男、という設定で登場した、名作中の名作だった。その評論で私は、1964年に『されどわれらが日々——』で芥川賞を受賞した柴田翔が、1965年6月に雑誌『文学界』に発表し、1966年に単行本として出版した『十年の後』を取り上げ、「この映画『故郷の香り』は、北京の大学を卒業した後、10年ぶりに故郷に帰ってきた主人公が、偶然初恋の女性と出会うところからストーリーが始まる。もちろん、柴田翔の『十年の後』とは時代も状況も全く異なるものだが、『その時代』の男女が感じる気持は万国共通で全く同じであるはず。そんな共通基盤があるため、この『10年の後』というテーマは永遠のもの……？」と書いた（『シネマルーム17』264頁参照）。しかして、本作が描く、大学卒業の数年後は？

まず些末なこと(?)を書く、同窓会のパーティーに集まった張開は出版社を営んでいるとホラを吹いていたが、実は屋台のような小さな店で細々と他人の伝記を本にして稼いでいるだけ。また、黎维娟は金持ちの子持ちの男と結婚し、阮莞は趙世永と別れ、阮莞に相応しい立派な男と幸せな結婚をしようとしていた。しかして、さて鄭微は？女優とはすごいもので、今や某大手企業のキャリアウーマンに成長した鄭微のキリリとしたスーツ姿や、部下を叱り飛ばしている姿のカッコ良さはキマっている。さすが一流大学を卒業し、幹部候補生として入社した鄭微だけのことはある。これなら陳孝正がアメリカ留学に行ってしまうと、立派にキャリアウーマンとして一生生きていくことができそうだし、その中でいい男とめぐり合えば、もちろん結婚だって……。



『So Young ～過ぎ去りし青春に捧ぐ～』 配給：アルシネテラン

©2013 HS Media (Beijing) Investment Co., Ltd. China Film Co., Ltd. Enlight Pictures. PULIN production limited. Beijing Ruyi Xinxin Film Investment Co., Ltd. Beijing MaxTimes Cultural Development Co., Ltd. TIK FILMS. Dook Publishing Co., Ltd. Tianjin Yuehua Music Culture Communication Co., Ltd. All rights reserved.

なるほど、辛夷塢の原作も、趙薇が初監督した本作も、そんなふんわかした将来への期待を匂わせながらジ・エンド。そんな青春に、みんなで拍手を！そう思っていると、実は・・・。

■□■卒業後の意外な展開がテンコ盛りに！■□■

本作は2時間11分と標準時間だが、ラスト約30分間は卒業後の意外な展開がテンコ盛りになっているので、それに注目！それをここですべてネタバレしするわけにはいれないが、何より意外だったのは（つまり趙薇監督がすべての観客を騙したのは）、林靜が実はアメリカ留学に行っていなかったということ。そう言えば、なるほど、スクリーン上には大空からガラスが落ちてきて、林靜が右手を怪我するシーンが登場していたが、それはそういう意味だったの・・・？

また、こちらは現実的な選択をしてアメリカに留学し、今や有名な建築家に成長した陳孝正が、なぜか中国に戻っていること。陳孝正はアメリカで結婚していたのに、なぜ離婚してまで、また中国に戻ってきたの？その結果、鄭微から離れて行ったはずの新旧2人の恋人が数年の後、相次いで鄭微の前に登場することになる。すると、鄭微はその2人のうちのどちらかを選ぶの？それともカッコ良く1人で生きていく道を選択するの？まずそれに注目したい。さらに面白いエピソードとして、幸せな結婚が決まったはずの阮莞の何ともあっけない人生(?)が描かれるので、それにも注目！

■□■最後に私事ながら、この新人監督にも乞うご期待！■□■

本作が北京電影学院卒業制作映画として9.9点をもたらえた理由は、もちろん映画レベルの高さだが、ハッキリ言ってそれは鄭微だけの能力ではなく、原作の辛夷塢、脚本の李樯、製作の關錦鵬（スタンリー・クワン）等々の応援のおかげだ。さらに、ラストに『致青春（To Youth）』を歌う、私の大好きな中国人歌手・王菲の参加も大きいはずだ。ちなみに、本作の製作費はHOW MUCH？

最後に私ゴトながら、私は本作鑑賞と同じ時期に、現在企画中の『鑑真に尋ねよ』という映画に500万円の出資を決定した。その脚本と監督をするのは、北京電影学院を卒業して日本の早稲田大学に留学し、この9月に卒業したばかりの26歳の女性・劉茜懿（リュウ・チェンイ）。もちろん、これは彼女の初監督作品で、公開は2016年5月の予定だが、趙薇と同じ北京電影学院出身の才女として、私は大いに期待している。

彼女は私が2007年10月10日に北京電影学院の美術学部で『坂和的中国電影論』の講義をしたときの受講生で、劉旭光（リュウ・シューグアン）教授の娘さん。したがって、趙薇ほどではなくとも、それ相応の人脈もあるはずだ。趙薇が初監督した本作で大成功したのと同じように、劉茜懿も初監督作品となる『鑑真に尋ねよ』で大成功を収めてほしいものだ。乞うご期待！

2014（平成26）年9月30日記